



王子神社

北正史を考える会

Association of Study on History of Kita-City in Tokyo

会報
第145号

発行 北区史を考える会
北区滝野川3-46-10-301
有馬純雄方(3917)8115
郵便振替 00130-6-47111

報告

第38回赤羽文化センターまつり

山田 美登里

前例の無い(コロナ禍)に依る2度にわたる中止を乗り越えて、今秋、やっと(センターまつり)が開催されました。その間、各サークルの活動や各人の心身にも厳しい影響があったかと思えます。

それ故、今回のセンターまつりには(やって良かった! 出来て良かった!)と言う思いが関係者の胸にはひとしおだったかと思えます。個人的には、以前、当日の受付の手伝いの経験がありました。が、初めてセンターまつりの(実行委員)となりまして何も解らず周りの方々にいろいろとお世話になりました。センターまつり当日を含め前後の準備・後片付けを入れ4日間は少々、大変でしたがどうにか切り抜けました。

私共の展示会場でありました(第10会場)は、俳句や短歌や歴史などの研究発表のグループでしたので、他の実演や作品の展示の会場とは少し趣が異なりゆったりと静かな雰囲気でした。

今年の当会からの発表は、本間氏に依る研究発表で大正時代『東京府下北豊島郡岩淵町大字神谷(現北区神谷)』に存在した(赤羽飛行場)についてでした。(参考資料: 会報142号)

展示のタイトルが「赤羽に飛行場があった!!」です。で来場者の中には「へー! 赤羽に?」と反応され、興味を示される方もおられました。他に用意しました会報のバックナンバールにも関心が寄せられ、持ち帰られる方もいらっしゃいました。

コーラスや舞踊・カラオケなどの実演部門は当日の忙しさがピークですが、我々の展示部門は逆に準備と後片付けが大変です。パネルや机などの大きな物を動かすので体力の自信のある方や若いセンターの職員の方々の協力が不可欠です。なにしろ、各サークルの皆様、豊かな知識と経験をお持ちですが体力はそれなりに減少しつつありますので無理をしない様、

ケガをしない様に準備から後片付けまで注意を払いました。

まつり2日目になりましたと実行委員として各会場を見回りながら、他者の作品を拝見し、力作にふれて素人な私ですが新鮮な気持ちになりました。又、実演部門では短い時間の中で精いっぱい演じる方々の気迫に感動し更にそれを見て幸福そうな聴衆の方の雰囲気はこちらも包まれました。

(新型コロナウイルス感染対策)実施の中、今年4月の総会から委員会や全体会を重ねて10月のセンターまつりに辿り着いたわけですので、改めて、センターまつりが開催され良かったと思うと同時に各サークルの関係者の皆様のご協力に感謝する次第です。

これからも、気を緩めることなく各サークル活動が充実し、各人の日常が健康で豊かであることを願って止みません。

晩秋の候

皆様どうぞご自愛下さいませ。



700年の時を超えて——王子村と王子神社——

北区飛鳥山博物館 学芸員 石倉孝祐

はじめに

王子神社は、本年9月に創建700年を迎えました。「王子」という地名の由来でもあるその歴史は、中世武士団豊島氏の動向や鎮座にゆかり深い紀州熊野三山と関わり、また中世芸能王子田楽や『若一王子縁起絵巻』、さらには明治初期の准勅祭社

列格など、地域史を彩る多彩な魅力に満ちています。今回、北区飛鳥山博物館では、令和4年7月16日(土)～9月30日(金)を会期として当館所蔵資料を中心に、王子と王子神社700年の歴史と文化を明らかにする展示を行いました。本紙面にてその内容の一端をご紹介します。

1 熊野三山への参詣と王子神社の創建

現在、ユネスコ世界遺産に登録されている熊野は紀伊半島の南端に位置する聖地です。ここにある3つの神社、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社は熊野三山と称されました。熊野へは、平

安時代末期の院政期から鎌倉時代にかけて、歴代の上皇や法皇、女院をはじめ多くの貴族が詣で、安穩を祈りました。やがて参詣は流行となつて諸国の武士や農民身分にも広がり、遠く関東にもその勢いが及びました。

紀伊守護人に補任された中世武士団豊島氏も、熊野への深い帰依を行い自らの所領である豊島荘を熊野三山に寄進しました。中世に諸国に設けられた熊野三山領荘園では、荘園の鎮守神として多く若一王子が勧請されました。土佐国吾橋荘(高知県本山町)では久安5年(一一四九)に、また日向国高知尾荘(宮崎県高千穂町)では建久9年(一一九八)に若一王子社が勧請されました。熊野の分社として「若一王子」を祀る方式は、平安後期から鎌倉後期にかけての古い形態であるとする見解があり、

武州豊島郡の若一王子宮もまた、中世初期に遡る可能性も指摘されます。平成6年(一九九四)から

11年(一九九九)にかけて、陸上自衛隊十条駐屯地内の建設事業にともない、埋蔵文化財の記録保存をはかることを目的に調査が開始されました。この十条久保遺跡の調査によつて、中世の道路面が検出されました。中世の鎌倉街道中道に相当する第1号道路路址が220mにわたつて確認されるとともに、これと交差して王子神社方面に連絡すると推定される、第2号道路路址が発見されたのでした。道路面の両側に側溝を有し、遺物から12世紀半ばから後半(平安時代末)鎌倉時代初期)に舗設されたことが考えられています。王子神社を起点にして延びる道筋は鎌倉街道中道などの主要道と連絡する道路であつたと思われま

す。王子神社は、近世以前においては「若一王子社」、「若一王子宮」あるいは「王子権現社」とも称され、明治元年に准勅祭社に列するに際して王子神社と改称した古社です。現在、飛鳥山公園には徳川吉宗によつて建立された「飛鳥山碑」があります。その碑文には、王子神社は「元亨中」に豊島氏によつて紀州熊野三山の祭神のひとつ、若一王子を勧請したものと刻されて

います。そして王子神社では、元亨2年(一一三二)をもつて創建年と定めています。この「若一王子」とは「にやくいちおうじ」と訓じ、中世熊野三山の祭神体系に含まれる神です。平安時代末、熊野では十二所権現と呼ばれる祭神体系が形成され、主祭神の三所権現とこれに次ぐ五所王子、四所明神が配されていきました。若一王子とは五所王子の第一位の神格です。

2 豊島氏と中世荘園、豊島氏

王子神社の勧請に関わる豊島氏は、11世紀中期に北区地域に定着した中世武士団です。『源威集』(東京大学史料編纂所蔵(佐竹家旧蔵))によると、天喜5年(一一〇五七)、鎮守府將軍源頼義に従つた7騎の中に豊島平兼杖恒(常)家の名が見え、また応徳3年(一一〇八六)の「源頼俊申文写」(『御堂撰政別記』の紙背文書・宮内庁書陵部圖書寮文庫所蔵、旧柳原本)にも豊島常家の存在が確認できます。北区豊島地区への豊島氏の土着も常家、あるいはその父、武常の世代が想定されています。中世の豊島郡には、豊島氏の開発による「豊島荘(庄)」という荘園がありました。その中

で王子神社は莊鎮守であつたと推定され、豊島氏を中心とする豊島郡内領主の紐帯として機能したことは、今に伝わる王子田楽における鑑武者が田楽衆を警護するさまや、槍合わせの儀礼にその姿を残しています。また鎌倉幕府の北方経営の進展とともに、街道鎮守としての役割も付与されました。

その後、南北朝内乱期から15世紀末期の豊島氏の滅亡（一四七八年）までの時期、王子神社は豊島氏一族を中心とする郡内地域地頭の結束の象徴として機能し、やがて供僧・衆徒を擁する自立した宗教集団を築いていきました。豊島氏没落後も王子周辺の戦略的 중요性と権現社の組織が独立していたことから、関東公方足利氏や戦国大名後北条氏の崇敬を継承しました。関東公方に対し年始、八朔、歳暮などの時候の挨拶に参上した寺社は、鶴岡八幡、饒阿寺、鷲宮とともに若一王子があり、社格の高さがうかがえます。足利義氏書状案（さくら市所蔵『喜連川文書』）を見ると、若一王子社による歳暮の祈祷への答礼として扇子が贈られたことがわかります。また、天正16年（一五八八）の北条氏政朱

印状（王子神社所蔵）によると、豊臣秀吉軍と対峙した後北条氏は、領国を挙げての防御拠点の構築が進められるなか、王子神社境内の伐採禁止を指令しています。当時、杉林を含む鬱蒼とした境内の景観が保たれていたことがうかがえます。また、『小田原衆所領役帳』には上平川（千代田区平河町）・下平川・牛込（新宿区）に合わせて28貫86文の「王子領」の貫高が宛がわれていて、江戸城に近い地域に所領を有していました。

3 近世から近代へ

天正19年（一五九二）、徳川氏によつて王子権現社領が王子村に寄進されました。その後、芝愛宕権現、浅草幸龍寺領が加えられ、王子村は寺社領三給の村として幕末に至りました。

太平の世を迎えた江戸時代、人々は江戸やその周辺の歴史や史跡への関心を高め、多くの名所記が著されました。17世紀半ばに作られた『江戸名所記』によると「若一王子の宮」は、「東照大権現」の帰依によつて社領20石が寄進されたことが記されています。また「風流のをどり」として王子田楽にも

言及されています。『むらさきの一（ひと）もと』には「若一権現の宮」は、深々と降る静かな雪の名所として記され、『江戸砂子』には寛永11年（一六三四）に徳川家光によつて壮麗な社殿が造営されたことが書かれています。王子への関心の深さがうかがえる記述です。

周知のように、王子の町は近代工業発祥の原点です。明治8年（一八七五）、王子の地に抄紙会社（後の王子製紙）が、後年財界の重鎮となる洪沢栄一の提唱によつて設立されました。翌年には官営紙幣寮抄紙局が相次いで開業、王子は日本のリーディング・カンパニーの出発点である大工場が立地する工業地へと姿を変え、やがて地域は大発展をとげていきました。

これに先立って明治元年（一八六八）、日本の近代化に先立ち神社にも大きな変化が訪れました。神仏判然の太政官布告がなされ神仏分離の結果、王子権現の別当であった旧金輪寺は廃寺となり、王子神社は准勅祭社に列格されました。准勅祭社とは勅祭社と同様に官幣使が派遣される神社で、東京周辺の12の神社がこれに選定されました。王子神社もこれに含まれ、この時、

従来の「王子権現」を「王子神社」と改称することとなりました。

おわりに —大銀杏は見た—

王子神社の境内には樹齢600年と伝えられる銀杏の巨木があります。神社創建以来の多くの時を見つめてきた銀杏の木は、今年もたくさんの葉を繁らせています。今から700年の昔、鎌倉時代末の京の都では、『徒然草』の作者である兼好法師や後醍醐天皇が激動の世を生きていました。その頃世界ではイタリアのマルコ・ポーロが、北アフリカにはイブン・バットウータがいました。この2人の大旅行家はともにアジアへの関心を深め、やがて遙かなる旅に出発しました。王子神社が創建された一三三二年とは、国内では時代の大きな変化を、世界では飛躍的な地理的関心が拡大した時代でした。そして現代。高度に発達した情報社会の中に、人々は暮らしています。しかし、世界的なコロナ禍の流行や、軍事侵攻が二〇二二年の今、終わることなく続いています。現代、そして未来へと、境内の大銀杏の前に、どのような歴史が刻まれていくのでしょうか。

お知らせ

第四六四回 月例研究会

日時 11月20日(日) 13時30分
会場 北とびあ一六〇二会議室
テーマ 幕府を創った男・義時
講師 伊藤一美氏
参加費 五百円

東国武士の想いを観察し、御家人同志のバランスを考える義時。父時政の生き方を学び、新しい時代を創る。だが、その「分裂・対立・崩壊」の要因も同時に生まれていく。その「からくり」を考えます。

第四六五回 月例研究会

日時 12月18日(日) 13時
集合 南北線王子駅改札口前
テーマ 港区立郷土歴史館見学
参加費 千円(入場料含む)

同館の建物は昭和3年竣工の旧公衆衛生院の姿を保存しながら再整備された歴史的魅力に富むもの。縄文期から現代に至る、港区の様々な様相、変化を遺物をもとに展示説明がされている。18日は特別展「人物でみる日本の鉄道開業」の最終日で、発掘された高輪築堤の史料展示とも合わせ、明治5年前後からの鉄道と人々との関わりを知

第四十一回定期総会並びに 第四六六回 月例研究会

日時 1月29日(日)
①総会 13時20分
②講演 14時

会場 北とびあ八〇三会議室
テーマ 江戸東京野菜の魅力
講師 大竹道茂氏
参加費 五百円

瀧野川、駒込、千住、谷中、寺島、亀戸、稲川、馬込、目黒、早稲田、雑司ヶ谷。この地名に就く野菜はナニニ。一つも分からなくとも、全問正解でも、それらに纏わる江戸時代からの地域と、人々に纏わる野菜の魅力についてお話を聞きます。大竹氏は江戸東京統野菜研究会を主宰。北区では瀧野川の人参、牛蒡が採り上げられます。

第四六七回 月例研究会

日時 2月18日(土) 13時30分
会場 東十条区民センター3階
テーマ 北区に唯一残る都電荒川線
講師 山下ルミコ氏
参加費 五百円

著者は郷土史研究家で「都電荒川線 沿線ぶらり旅」を著された。同書は全停留所周辺の人々の多様な暮らしぶりや史跡を取材、また古地図、資料をもとに地域や荒川

線の歴史も併せて紹介されている。取材時のこぼれ話や参加者の荒川線の思い出話を交え楽しく進めて行きたい。

運営委員会報告

◎10月23日(日) 出席5名
報告事項
・林会計 会費未納者6名(変らず)
・山田委員 赤文センター祭報告
協議事項
・元氣ぷらざ展示物の件

前の展示物を今年の物と取替える
林・上野両委員が本間氏と連絡
・12月以降の予定を決める。

次回運営委員会

◎12月13日(火) 18時30分
◎1月17日(火) 18時30分
東十条区民センター3階

受贈本のお知らせ

◎足立史談654 / 656足立区郷土博物館
◎足立史談会日より413 / 414足立史談会
◎板橋史談313 板橋史談会
◎練馬郷土史研究会会報386
練馬郷土史研究会
◎城郭だより119 日本城郭史学会

会員募集中

会の活動に関心のある方は、月例会にお出でください。

編集後記

コロナウィルスも新しい変異株が次々現れ、この冬は第8波の心配があるとか。

今年の赤羽文化センターまつりは、第7波がおさまった時期であったため、実施することができた。

私事ではあるが、最近会話などに不自由を感じるくらいに耳が悪くなり、補聴器を利用しているがなかなかうまくいかない。このこともあり、私も会場に2日間詰めだが、展示の説明等は主に本間氏に頼ることになってしまった。

ところで昔と比べて、来場者は減っている。展示会場や舞台の客は、参加団体の関係者か知人がほとんどではないだろうか。

1階、2階には買物客がたくさん来ているのに、3階まで回って来ない。会館1階の入口やエスカレーターの前に、センターまつりのポスター等を置けないのだろうか。これまでにいきさつや事情があるやに聞いてはいるが、何とか実現してほしいものだ。

なお10月23日の例会「赤羽飛行場の新資料」の内容は、次号に掲載する予定です。

(林)